

『オロッコ・ギリヤークの生活』

6104 『オロッコ・ギリヤークの生活』

宮本馨太郎・16ミリ・18分・一九三八(昭和十三年)八月一九日〜三一日・所蔵 〓宮本記念財団

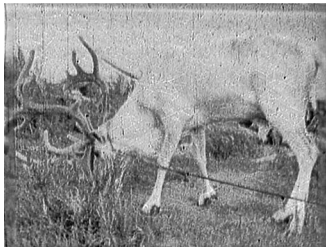


▶オタスの社のソンドラ景観と先住民の住居。

樺太北方文化調査民族学班の旅
日露戦争の勝利によって、北緯50度以南の樺太島は日本領となり、鉄道、道路、港湾などインフラ整備も進んだ。他方「オタスの杜」(後述)は、ソンドラでのトナカイ飼養を持続するオロッコ(現ウイリタ)、サケ・マス漁とアザラシなど毛皮獣の捕獲を行うギリヤーク(現ニヅフ)など、北方少数民族の生活の様子にふれることができる魅力があった。アイヌを除く島の少数民族の多くが国家政策によって半ば強制的に囲い込まれたものであるが、「最北の地」の珍しい景観と少数民族の存在は、観光資源として注目され、絵ハガキ、写真帖(佐藤一九三七)、手工芸品などの観光土産や、歌舞や儀礼のパフォーマンスなどが提供されていた。

一九三八(昭和十三年)八月、日本民族学会(現日本文化人類学会)の第二回北方文化調査として、樺太調査が古野清人を代表とする民族学班の手で行われた。班は、古野、須田昭義、宮本馨太郎の三名によって構成された。古野と須田の調査記録は、筆者が探索した限りでは発表されていない。調査の主目的は、当時の樺太庁敷香町近郊の「オタスの杜」と呼ばれた北方少数民族居留地(アイヌを除く)での生活状況の撮影と民具収集であり、その成果は「オロッコ・ギリヤークの衣食住」(宮本一九五三)に概略が述べられている。

樺太調査は一九三八年八月一〇日上野発、同三十一日上野着の二二日間の旅程で行われた。当時若い宮本が会計を担当し、出納を記録した。宮本は三冊の小型ノートを持参し、一冊目が日々の記録、金



▶使役用のトナカイ。



▶オロッコの円錐形テント。トナカイの移動とともに生活するので、組み立てやすい。

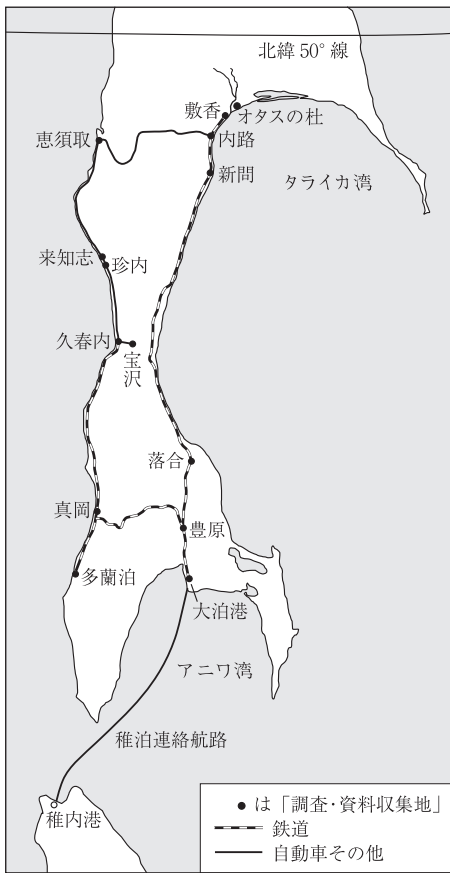
銭出納簿となっている。調査の旅程をこのノートに沿って辿ることにする。

表紙には「北海道・樺太アイヌ・オロッコその他(1)昭和13・8 宮本馨太郎」、二頁目は白紙で三頁目「昭和十三年八月 北海道樺太 雑記帳」、四頁からは毎日の金銭の出し入れと主な行動について、几帳面な特徴的な文字で書き入れている。金銭出納記録は五〇〇〇円の旅費を受け取った七月二十五日に始まり、出費の金額と品目を記し、おそらく現金の照合後に捺したと思われる赤い「済」の印を各金額の頭に押している。

二五日から出発までの間に杉山寿栄男、金田一京助、久保寺逸彦などのアイヌ文化研究者に会って情報収集や助言を得ている。撮影機材としてさくら一六ミリフィルム(宮本はヒルムと表記一〇〇尺六巻、五〇尺六巻、さくらヴロウニスベシャルクローム一五本を購入。

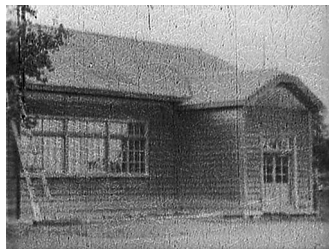
八月一〇日樺太へ出発(調査行程は地図参照)。

午後七時上野発、一日午前七時四五分青森着、県庁、図書館、市街見物後に浅虫北見館にて昼食休息、午後四時二七分青森着、午後六時鈴谷丸で青森港発。





丸木舟。形状から見てオロッコのものであろう。



「土人教育所」の校舎。

一二日早朝小樽着、汽車で白老へ向かう。白老ではアイヌの熊坂次郎(六九歳)、野村善七(五九歳)を訪ねし聞き取り調査、木下写真館製のアイヌ写真を二一枚購入。宮本はこの時ノートに囲炉裏鉤やカンジキなど数点をスケッチし、アイヌ語名を記入している。

一三日は北大博物館で名取武光に会い、小樽で三井物産支店を訪問挨拶、再び札幌で児玉作左衛門・名取・犬飼哲夫に会う。午後七時五〇分発の列車で稚内に向かう。

一四日午前六時四〇分稚内着、連絡船の垂庭丸で八時出航、樺太に向かう。午後五時一〇分大泊港着。七時五分、樺太庁所在地の豊原(現ユジノサハリンスク)着。

一五日樺太庁、博物館、憲兵隊、中央試験場等訪問、樺太庁では長官に挨拶し学務課にも行っている。一六日午前七時五〇分豊原発列車で敷香へ向かい、午後八時敷香着。

一七日午後、オタスの杜に行き、「土人教育所」の教員・川村秀彌(宮本ノートは河村と誤記)に会い集落見学。

一八日オタスの杜で種々調査。「オロッコもギリヤークも予想外に文化的な生活をして居り、所謂土俗品等はこの家に行っても殆ど見当たらないので失望する」と宮本は記す。土人教育所長川村の収集品二〇点余を購入、名称および使用法等を記録。

一九日、雨天で午前中休養。

二〇日、支庁訪問後、オタスへ行き民具収集およびシャマンの撮影。

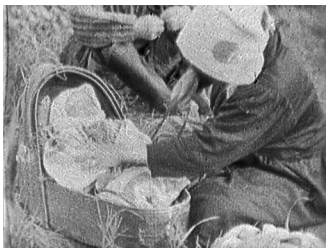
二一日、新聞アイヌ部落見学、東氏を訪問、アイヌ民具収集。

二二日、古野・宮本両名は多蘭オロッコ部落訪問、民具収集。須田は新聞の土人作業地で手絞指紋か)を採集。

二三日オタスで終日映像を撮る。古野・須田は敷香で各方面への挨拶。宮本フィルムの撮影は八月二〇日と本日の二日間で大部分が行われたとみてよい。両日とも映像の様子からみると天候は非常によさそう、絶好の撮影日和であったようである。



幌内川の岸近くで作業する男。



ゆりかご。オロッコの特徴的な形態の曲げ物造り。木に吊して揺らしてあやすこととする。

二四日敷香を発って自動車で恵須取へ。

二八日夜は豊原、二九日正午大泊発、午後八時稚内着、一〇時一五分列車にて函館へ。三〇日午後五時青森発、三一日午前一〇時五〇分上野着。

大泊から稚内に向かう船に乗って樺太を離れるまでの四日間は西海岸の来知志、久春内、宝沢、智来、多蘭泊などのアイヌ集落で民具収集や聞き取り調査を行った。

映像の内容

映像は「オタスの杜」周辺に限られている。撮影はツンドラ風景から始まる。宮本自筆ノートによれば八月二〇日と同二三日に撮影が行われたと記されている。最初は高い位置からツンドラを俯瞰し視線を低めながら丈の低い草原とまばらに生えるカラマツやシラカンバを映している。白い角の大きなトナカイがコケを食む様子。比較的大型で首輪をしているところから、去勢されて荷物などを運ぶトナカイである。トナカイの餌は俗にトナカイゴケと呼ばれるハナゴケが主である。このコケは一年に数ミリしか成長しないので、トナカイ飼養民はコケを求めて移動生活をしていた。次いでツンドラに広がるイソツツジや漿果類など、丈の低い植物。撮影した八月はツンドラに赤や紫、黒のさまざまな漿果類の実がなる時期である。

次に見えるのはオタスに建つ円錐形住居と木造住居。敷香土人教育所。幌内川の岸辺に係留された小型の舟。オロッコ女性が薪を運ぶ。白い布を覆いにする円錐形住居。夏の仮テントもみえる。狩りにかけた時など、四本の細い木の枝を支柱に組み立てる四角いテントである。

若い女性たちの縫い物風景。みなロシア風のワンピース姿で、髪をきつちりと三つ編みにしているのが印象的である。宮本はその手元をしっかりと撮影しており、日本とは異なる針づかいが明確である。彼女たちは皮の容器や衣服に伝統的な文様を刺繍で飾ってきた。この技術を生かして、トナカイ革の財布、花瓶敷きなどに刺繍したものが観光客に好評で、よい収入源になっていた。現在残ってい



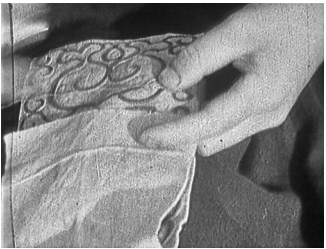
▶オロッコの樹上葬。死者を木棺に納めて、樹上に葬る。



▶クマの骨送り(オロッコ)。霊力が宿る骨を森の主(クマ)に還すことによって、再び肉や毛皮をまもって甦って来訪すると信じられていた。



▶シャマンの衣装を身につけたオロッコの女性。



▶トナカイのなめし革に刺繍をしている。独特の針づかいで、裏側に糸目を出さない。

る作品をみると、絹の色糸刺繍は皮の表面に美しく表現されているが、皮の裏面にまで針を通さず、皮の厚みのなかばで針を表面に出すという、極めて繊細な技術を用いていることがわかる。子どもたちのほほえましい様子。授乳の様子。授乳が終わると曲げ物細工のゆりかごに赤子を寝かせて、紐をグルグル巻いて結わえる様子がわかる。ゆりかごを脇にかかえて赤子を運ぶ。移動生活ではトナカイに振り分け荷物のように、赤子が入ったゆりかごを結び付けていた。

先ほど刺繍の様子を見せていた若い女性たちのベリー類採取の様子。それぞれ白樺容器を手にしていく。適当にベリーを口に入れ、談笑しながら行うベリー採取は女性たちの楽しみでもあった。

老女による樺皮容器作りの工程映像。樺皮は六月ごろ剥いで保存しておき、必要な時に湯で煮たり火で温めるなどして柔らかくしてから作業にかかる。四隅を折って容器を作り、ヤナギの根などの細紐で縫って形を固定する。樺皮は乾燥すると非常に硬く、丈夫な容器となる。この作業工程を、宮本は物質文化への鋭い眼で丹念に撮影している。

再びツンドラ風景とオタスの人びとの墓地。ロシア正教とわかる木製墓標も多い。ニヴフの家型棺もみえる。ここで宮本の眼はおもしろい映像をみせる。高いカラマツの木に吊り下げられたクマの骨格である(写真)。頭骨の下に脊椎が連なっている様子がわかる。筆者はかつて戦後樺太から網走に移り住んだウイルタの北川アイ子さんやゲンダーヌさんからウイルタの伝統文化について教えを受けた。クマ肉を食べ終わると骨はすべて集めて柳の枝や皮で繋いで木に掛けて送り、再生を願うという話を聞いたが、具体的なイメージが浮かばなかった。その後、ロシアのワシリイェヴィチの著作に、島の対岸に居住する先住民エヴェンキヤやナナイに関する論文の中にクマの骨送り図をみつけてはいたが、宮本フィルム映像によってより鮮明に理解することができた。この映像の最も重要な部分であるといえよう。カメラは墓地をなめるように動き、樹上葬されている子どもの小型棺や、草の中で朽ちていく木棺などをみせる。

ウイルタの円錐形テントの前で女性シャマンが衣装をつけて削りかけの頭飾りをかぶり、太鼓を打

ちながら踊り始める。腰の後ろにはさまざまな金属類を下げ、腰を左右にふるたびにジャラジャラ音をたてるのが、無音ながらわかる。太鼓は片面にアザラシの皮を張り、犬の毛皮を巻いた棒で打つ。太鼓が終わると、ヨードフと呼ばれる魚皮製のガラガラ様のものを両手に持って踊る。男シャマン登場。アザラシの皮製のスカート状のものを腰に巻いている。頭飾りや帯、腰の金具、太鼓やヨードフ

も先の女性が用いたもので、白い円錐形テントも含めて観光客に見せるためのシャマン踊りであろう。この後ツンドラやベリー採取、刺繍の様子、ゆりかご、トナカイ、波打ち際の舟、シャマン、樺皮細工、墓場、テントの周囲で見物する人たち、子どもたち、授乳、シャマンの金具などの場面がリフレインされて、一八分の映像は終わる。

宮本馨太郎は本調査において、民具を「生活の用具」としてとらえ、体系的かつ「動的」にこの記録と収集を行った。いわゆる「民芸」としてもはやされた「一品物」の「選択」ではない。可能な限り動的にモノにかかわる「技と知恵」を含めて記録することで、調査対象文化の本質的理解にせまろうとするものである。宮本による物質文化研究の方法論の原型は、この調査行によって具現化したといえよう。

(大塚和義)

参考文献

- 佐藤勝信「敷香写真帖」カギヤ書店、一九三七。
宮本馨太郎「オロッコ・ギリヤークの衣食住」『民族学研究』第二二巻第一・二合併号、五一―一四頁、一九五三。

*本稿における民族名、地名等は宮本馨太郎の調査ノートの表記を基本とした。ただし、筆者の考察部分は、現代における民族名称を用いる。なお、先述したノート記録に従えば、撮影日などの点で確定には検討を要する部分の本稿には残されていることを明記しておきたい。